

幼稚園の教育

Nursery-Kindergarten Education

Ed. Jerome E. Leavitt

.....Mcgraw-Hill Book Co. Inc. N. Y. 1958

第八章の芸術においては、「芸術の目標」子どもの芸術性を刺激するもの、「典型的な芸術活動およびその成果」「芸術活動に必要ないろいろの材料」などにわたってかなり広く述べられています。

ここで「芸術」と言っているのは主に「子どもの創作活動」のことを指しているように思われます。そしてその子どもの創作活動の目標は、1、創造性を高めること。2、不可思議の世界に目を向けるようにすること。3、自分の考えや欲求を満足に表現できるようにすること。4、自分自身や友人を正しく評価できるようにすること、などであります。このような目標が達成されることによって、ナースリー・スクールや幼稚園自身の目標でもある「情緒的成長」が促され、「人格的豊富さ」が増していくのです。

子どもたちは朝ナースリー・スクールや幼稚園に来てすぐ何かをしようとしますが、その時すぐ子どもの気持を鼓舞するような材料が目につくようになっていくことはとても必要なことです。自由遊びにおいて子どもは思

いきり自分を表現することができます。自分にもっとも適した遊具を好きなように使って自分を表現することができ、その時こそ子どもたちがもっとも満足している時なのです。

そんな時教師は子どもたちにとって安全でしかも自由に創作活動ができ、自然に考えや感情を表現できるような雰囲気を作るように努力すべきです。さらに各々の子どもを個人的に観察し、いろいろの援助を考えることも教師の大切な仕事です。それと同時に子どもをほめてあげることも是非必要です。上手にほめることは子どもの自信を元気づけ、次の活動の重要なエネルギー源になります。こうして遊びに興味を持ち熱中してくると、子どもは次第にグループの中にとけ込んでくるようになります。同じ材料への共通の興味とか、同じ活動の共通の喜びをお互に分け合うようになりなると、友人とも仲よく遊べるようになりますし、それはより健全な社会性の発達に役立ちます。子どもがひとり、または集団で遊んでいる時にしばしば自己主張をしているのを見ますけれども、そのような「つまず

き”もやはり成長の一つの現われと見てよいのです。そういう時は指導さえ上手であればかなり価値のある社会的適応を示すようになります。さらに成長してくるとお互の作品を観察し合ったり、評価し合ったり、また自分たちのしていることについて話し合ったりして次第に集団意識が発達してきます。

子どもの創作活動をあずかる教師にとって大切な事は先ず第一に子どもと共同製作者であるという気持で子どもの製作場面に接することです。第二に自由に創作活動ができるように子どもを理解して、子ども自身に働きかけることです。(しかし、あまり干渉しすぎないこと)。第三に子どもの環境を子どもの活動に向くようにとのえてあげることです。

子どもの創造性を刺激するものとして、子ども自身の経験、子どもの感覚(感受性)、友人などと経験を話すこと、リズムミカルな運動、物語・詩・音楽・創作劇、子どもの自発的な歌・詩、いろいろの材料、ピクニックなどがあります。毎日の生活でいろいろと経験されたことが再び思い起こされた時に初めて

芸術表現の生きた内容となるのです。しかしその時の子どものアイデアや感情はおそらく異なった形で表現されるでしょうが、それはかまわない事なのです。子どもの創造的思考の単なる出発点として働きかけることができればそれでじゅうぶんであり、創造性の方向づけまで決めることは、かえって上手な指導とは言えません。たしかに各々の子どもの感受性、感覚といったものも、芸術表現と切りはなすことができません。例えば、悲しかったり、おそれていたり、失望したりしている時に、子どもたちはそれらを芸術の中に表現することを覚え、時には自分でも驚くような何かを描いたり作ったりするかもしれません。そのような時の製作品は子どもの情緒的安定を得るのにとっても有効です。第一に限られたことば(語彙)では表現できない気持を紙に描きつぶしてしまうので、ほっとして満足しますし、第二にある感情を知ることによって初めてその感情のコントロールができるのですから、表現能力が増すと共に子ども自身当惑するような強い感情に直面した時にも上

手にそれを抑制するすべを知るようになり、友人同志でお互に経験談をすること、われ先にとしゃべり合うこと、これも芸術表現のよい源となります。興味が深く子どもの心に残っている中に、記憶の生き生きとしている中に、そのアイデアを書きとめるなり形に現わすなりすることが重要です。リズムカルな運動について述べられている所できくにおもしろいのは *feeling-dancing-painting game* と呼ばれるものです。つまり子どもは何か材料をつかみ、その材料が彼に感じさせるままにダンスをし(動き)、そしてその感覚・感動で絵を描く。初めに与える材料に対象的なものを選べばおそらくちがった感じの描画が生まれてくることでしょう。例えばなめらかなもの、ざらざらしたもの、あらいもの、こまかいものなどなど。また香りをかいて感動を動きに現わし、そして絵を描くということも考えられるでしょう。その他聴覚視覚に訴えることも有効だと思われまます。劇遊びもまた子どもたちに喜ばれます。きつと子どもの感情をくまなく表現できるからでしょう。

身近に知る物語り・詩・音楽の中でもっとも興味のある好きな部分を演ずる―それでじゅうぶんなのです。何もことさらに劇に仕組む必要はありません。自分や友人の作った短かい歌などを、とても気に入った時は、大きな絵に描きたがるのも子どもたちです。

絵に限らず、ある時は粘土で形を作ったり、衣裳をつけて踊りたがったりします。そして子どもたちの造り出す歌は、書き記しておくほどに長いものではなくても、ほんとうにすばらしい歌、すばらしい詩であることを認めてあげることが大切です。もし書き残してあげられたら子どもたちはどんなに喜びますことでしょう。テープレコーダーなども大いに利用したいものです。遠足もまた子どもの創造的経験にもっともよいものの一つです。しかしいつもそうであるようにここでも大切なのは実際に方々を歩きまわってきた後の指導法です。帰って来てからも子どもたちの楽しさを延長させるように、その経験についても一度考えたり話し合ったりすることが大切です。そうすることによって子どもは自分の印

象をいろいろに分類したり、組織立てたりするので。そのように印象を子どもたちの血肉に同化するだけの時間の余裕を与えることが必要であり、その結果各々の経験が子ども自身の全体的人格の統合に役立つのです。

教師は子どもの活動が子どもの発達にどのように役立つているか、またひとりひとりの子どもについて教師の計画したことがどんな結果になって現われてくるかを調べるということが重要な任務です。適当な指導のもとに創造的経験がなされた時、子どもたちの得るものは、建設的特性であり、情緒的欲求の満足であり、知識の豊富さであり、批判力・創造力・美的感覚の発達であります。

子どもたちが創造活動に従事している時に教師はひとりひとりの子どもについてよく観察し、その子どものもっとも要求しているものが何であるかをよく理解し、それにこたえるようにしてあげ、またよい面はほめてあげるようにすれば子どもは自分の能力や価値について自信を持ち、安心して遊び仲間に入っていけるようになります。このように自信が

高まっていくに従って子どもたちは次第に自分が環境・材料・仕事・友人などと無関係ではないことに気づくようになり、遊び仲間によりよく適応できる大きな支えの一つになります。教師の正しい批判、価値づけ、子どもの発達に応じた温かい援助が、子どもの建設的特性をのばすのに大いに役立ちます。

不安とか攻げき性は子どもたちの情緒発達を妨げますが、芸術活動によりそれらは取りのぞくことができる場合もあります。しかも他人に迷惑にならない方法で発散させることができます。つまり「くぎ」を打ち込みながらいっしょにはき出してしまったり、粘土といっしょにすりつぶしたり、紙にぬりつぶしたりしてしまふのです。

また、子どもたちは一つの活動に従事する時は、どうにかしてその仕事をもっとも良く仕上げようと思えますので、必然的にきぎ一本を打つにも工夫しなければなりません。ときには失敗などして、また自分で考えてやり直したりするのでなおさら、彼らの才知・独創性・心の訓練などが出来ていきます。批判

力・美的感覚なども養なわれていきます。絵を描こうとしている子どもたちがこの紙ちょっと大き過ぎると言ったり、描いている中にもう少し濃い色ないかしらなどと言ったりしますが、これは自分の描こうとするものと、材料との感覚のずれに気づいているからだと思えます。また絵を描いている時に「水がたれてしょうがない」と言っている子どもに対して他の子どもが「水を吸いとってしまえばいい」とか「絵の具に水が多すぎるのよ」などと言ったりしている。また粘土細工で作った人形が立たないのをみて頭が大きすぎるのに気づく子、足が細すぎるのを指摘する子どもいろいろありますが、それらは皆その批判力・調和の感覚が発達してくるからです。

- 最後に典型的な創作活動の例として
- a. 粘土細工
 - b. コラーージュ・モンタージュ
 - c. 版画
 - d. 描画
 - e. ままごと遊びの類
 - f. 積木・組木から簡単な工作まで

g. 人形芝居

h. 針金の組み立て（モール細工など）

i. 衣裳つけ

などが挙げられています。

「コラーージュ・モンタージュ」と言うのはどちらも、廃物を利用して自分の好きなものを表現することです。一枚の適当な大きさの板なり紙なりに、毛糸のくず、瓶のふた、紙や布の小切れ、テープの残り、ボタン、鳥の羽根などあらゆるものを芸術的に貼りつけていくのです。

「版画」も普通の木版・石版・銅版などに限られることなる瓶のふたを使ったり石を使ったり、子どもたちは結構いろいろとさがし出して来ます。

「衣裳つけ」にしても決して定まった衣裳を用意するのではなく、単なる布切れを子どもたちが自由に取り出せるようにしておいてあげれば、自分たちで好きなように頭からかぶったり腰にまきつけたりして遊びます。ただ色彩・数を豊富にとりそろえてあげられたら理想的です。（お茶の水女子大学 吉田三和子）

幼児の教育 第五十九巻 第一号

一月号 © 定価 五十円

昭和三十四年十二月二十五日印刷

昭和三十五年 一月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼

発行者 津 守 真

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所

日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所

凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社

フレール館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレール館にお願いいたします。